

令和8年熊本地震の 地表地震断層と変位量の分布、 ならびに八代地域の地形との関係

高橋尚志¹⁾・Luca C. Malatesta^{1, 2)}・原 勇貴³⁾・
鳥井真之⁴⁾・飯塚浩太郎⁵⁾・遠田晋次¹⁾

1) 東北大学災害科学国際研究所 災害評価低減研究部門 陸域地震学・火山学研究分野

2) GFZ Helmholtz Centre for Geosciences

3) 応用地質株式会社

4) 熊本大学くまもと水環境・減災研究教育センター

5) 兵庫県立大学 環境人間学部

令和8年熊本地震の緊急現地調査

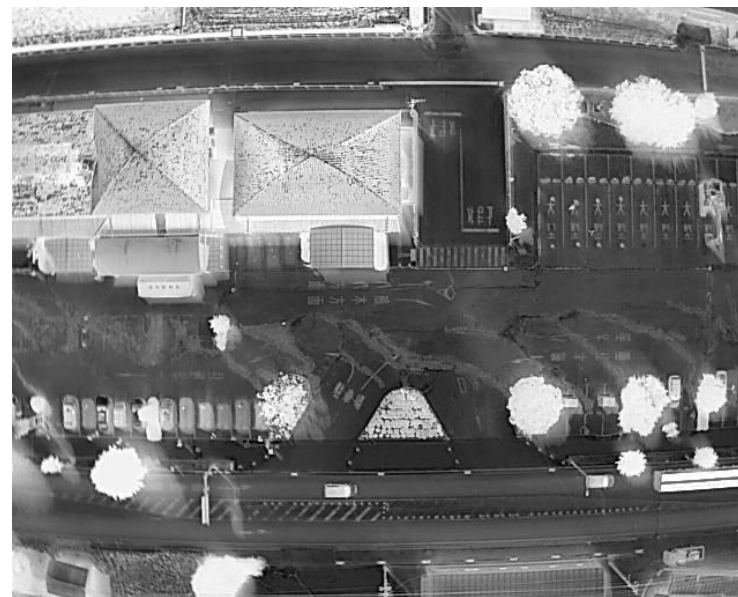
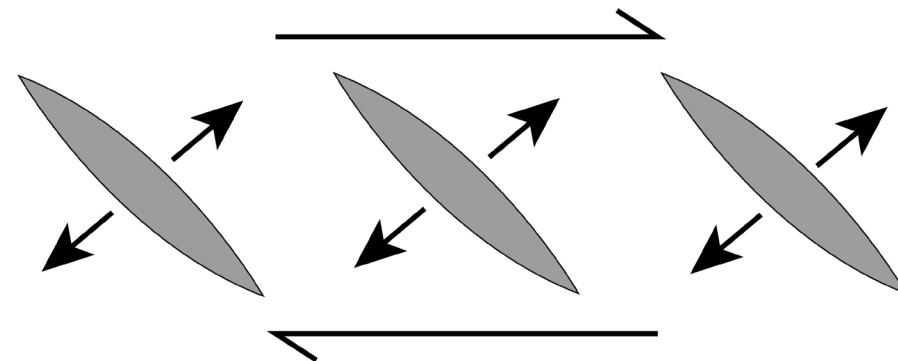


7月31日～8月3日に八代市，氷川町，小川町，宇城市，御城町などで緊急現地調査を実施。
被害状況の確認とともに，地表地震断層とみられる地表変状の位置をマッピングし，それらの変位量を計測した。
断層をまたいで地震前にひかれていた直線状の地物（主に道路の白線，塀など）を基準として，
断層走向に平行な方向の変位量を計測した。

ドローンによる地表変状の追跡



道の駅竜北 駐車場に生じた雁行状の亀裂



サーモカメラも援用して、地表変状の追跡を実施。

令和8年熊本地震による被害



断層変位に伴う九州自動車道の橋脚の破断



断層変位の出現した水田と家屋の被害状況

令和8年熊本地震による被害



断層変位で被害を受けた家屋
(左：氷川町，右：小川町)

断層変位により亀裂の入った農業用ため池の堤体
(小川町)

令和8年熊本地震による被害



断層変位による農業用水護岸および果樹畑の崩壊



山間部の国道沿いにおける土砂流出（八代市東陽町）

斜面に設置されていたパイプが破断したことによるものとみられる。
山間部でがけ崩れや落石は幾つか生じていたものの、調査を実施した
エリアでは斜面崩壊による被害は限定的であると見受けられた。

地表地震断層の分布

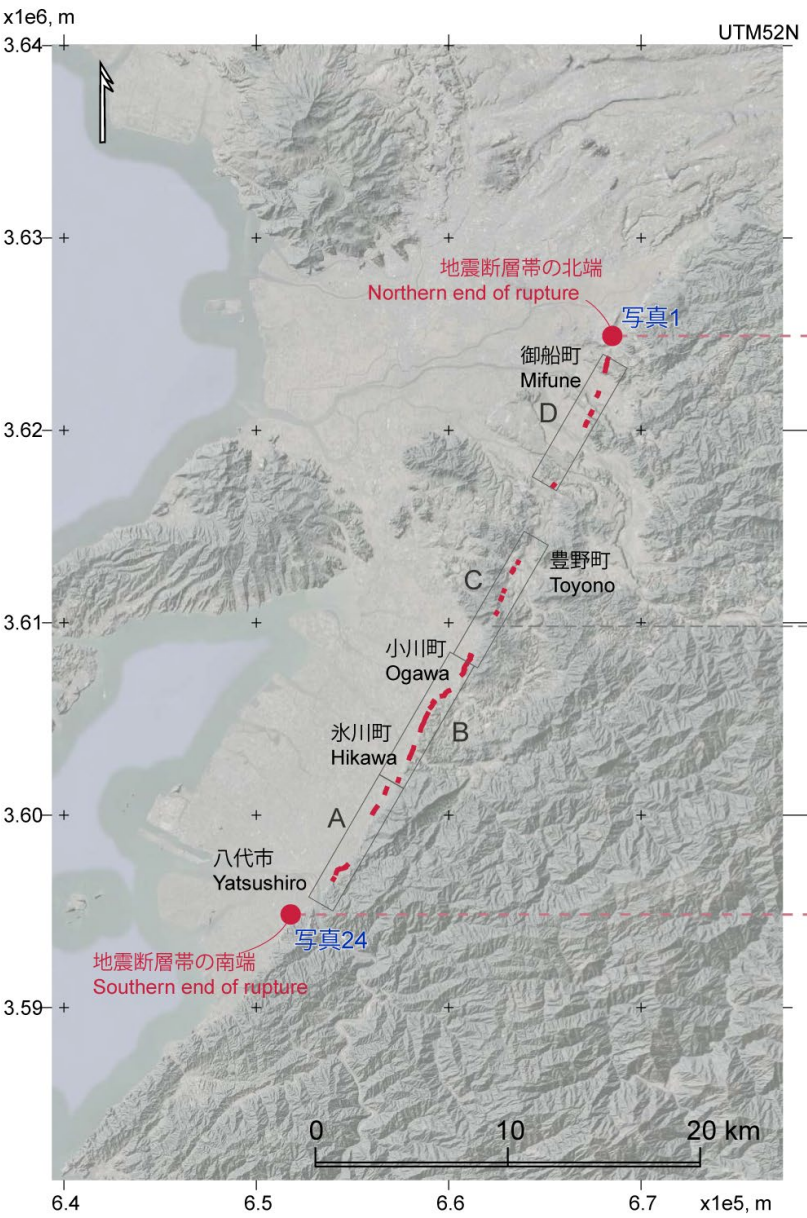
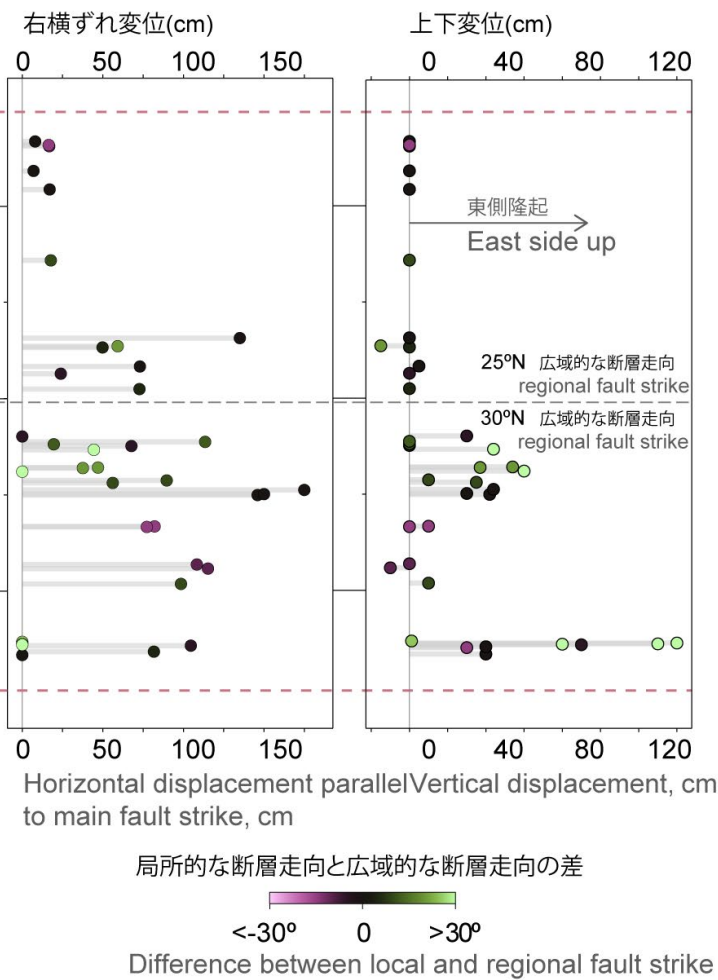


図1 令和8年熊本地震にともなって現れた地表地震断層の分布（マップの赤線）
おおむね右横ずれ変位で特徴付けられる．最大変位は横ずれ175cm．局所的に上下変位も顕著で，八代ジャンクション付近で約150cm．分布域は長さ約33kmに及ぶが，主たる断層変位は宇城市豊野町以南の20km強に限られる．マップでは断続的な分布にみえるが，これは未踏査のためであり，今後の調査・画像解析によってほとんどの区間がつながると考えられる．



御船町平成音楽大学付近の道路に出現した断層変位
ここでの右横ずれ変位量は約17～18 cm

都市圏活断層図 活断層線との関係

- 2026年熊本地震の地表地震断層とみられる変状は、推定されていた日奈久断層帯におおむね沿って出現した.
- 高野—白萩区間（D）では、2016年に活動したものと含め、おおむね断層線と一致する.
- しかし、日奈久区間（A～C）では、**推定断層線よりもやや平野側**に出現していることが多い.

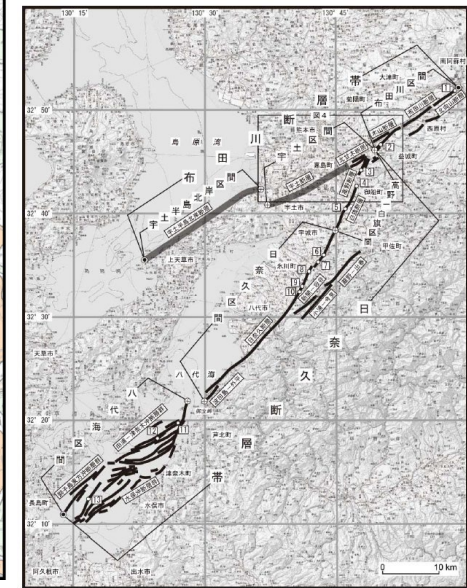
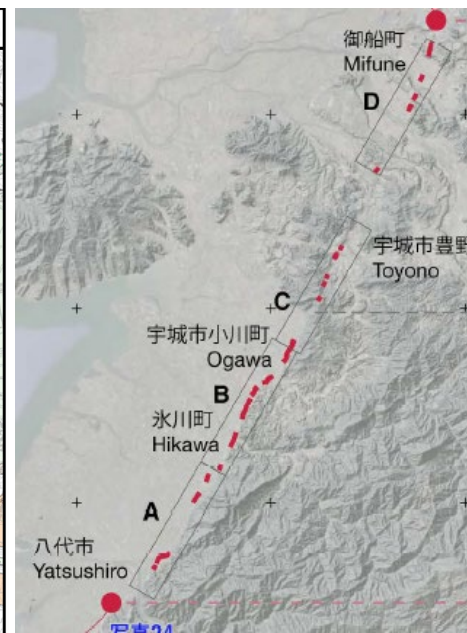
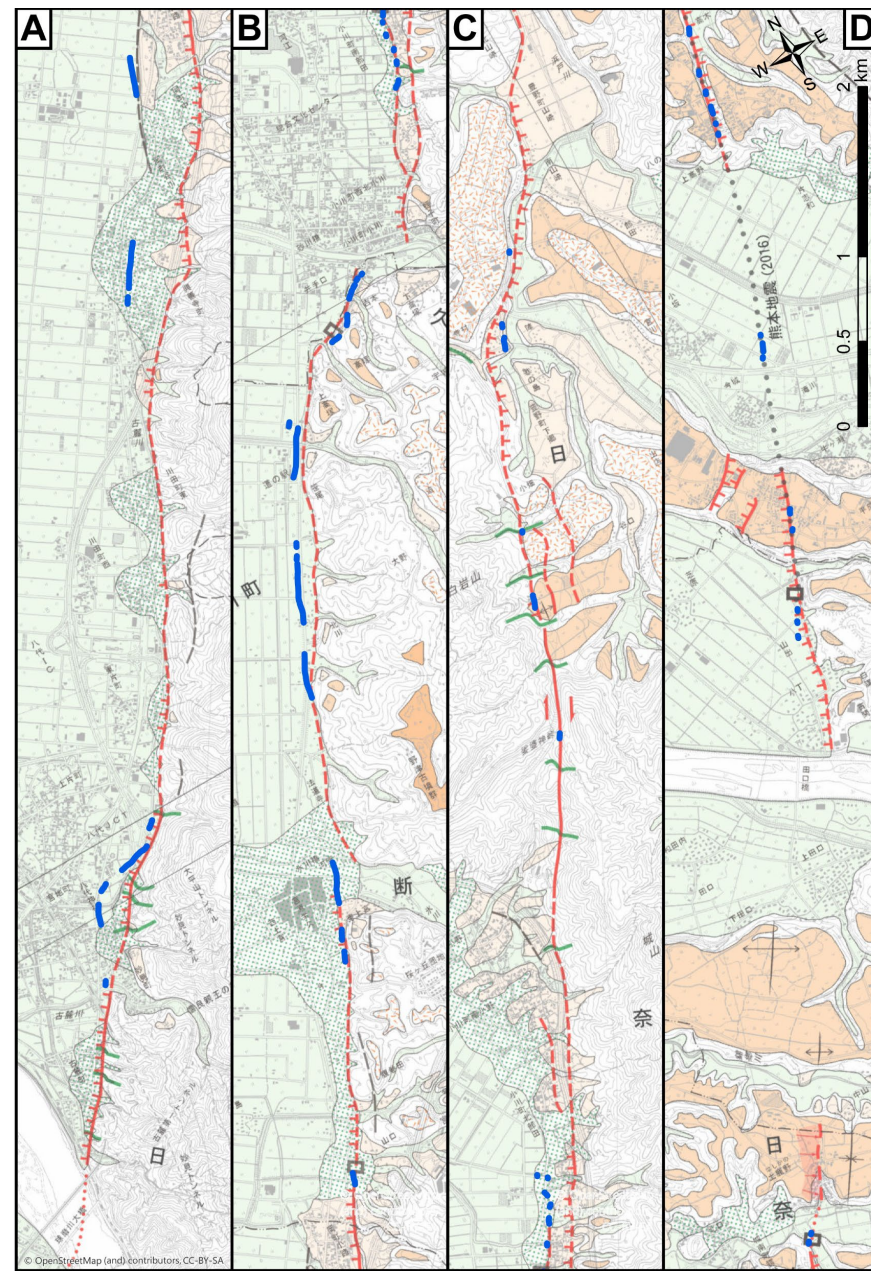
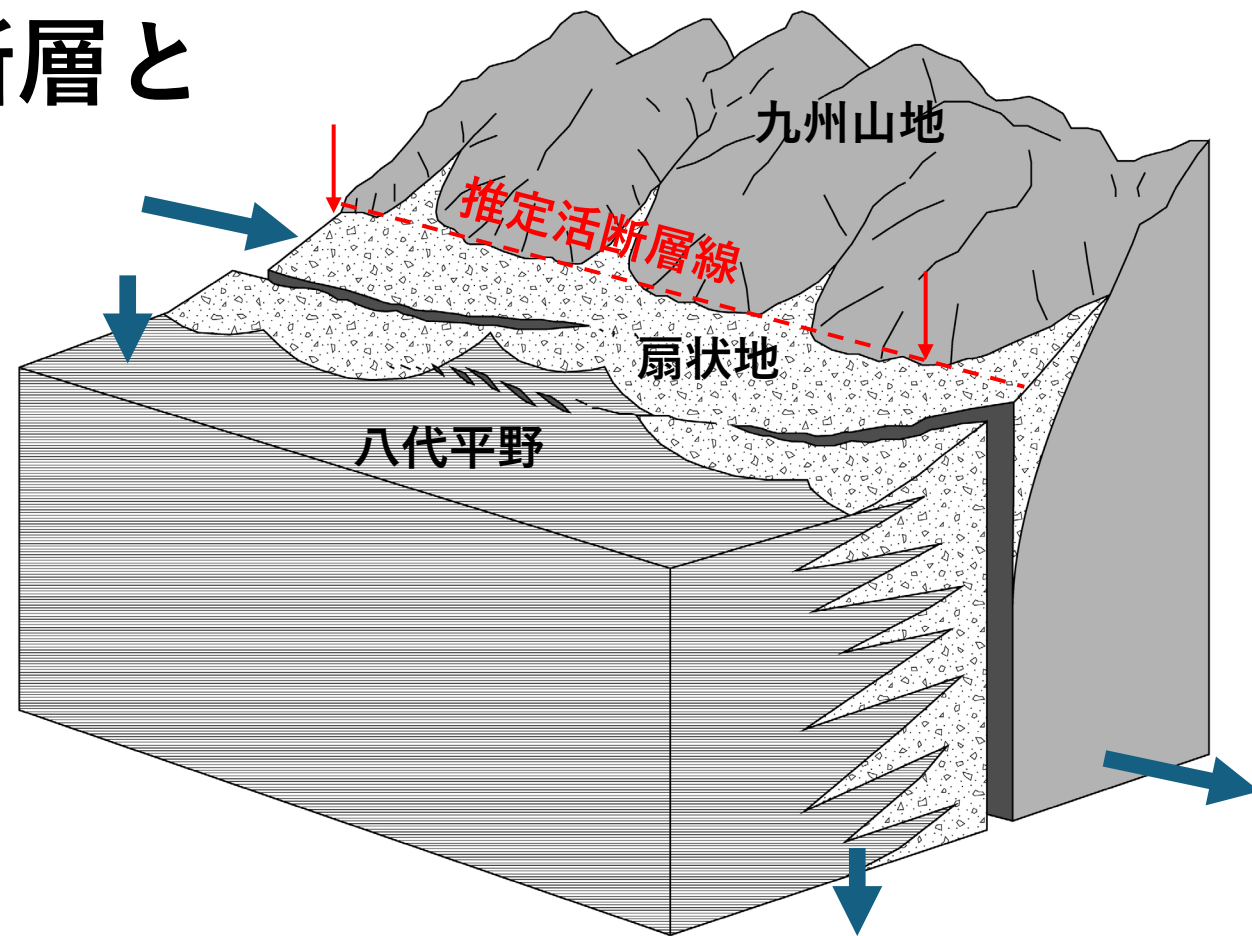


図2 令和8年熊本地震にともなって現れた地表地震断層の詳細分布（青線）
背景は国土地理院都市圏活断層図で、赤線が事前の活断層位置。写真番号は次ページ以降の写真の位置。矢印の向きはおおよその撮影の向きを示す。マップでは断続的な分布に見えるが、これは未踏査区間が多いためでもある。

地震本部HPより

八代付近における地表地震断層と地形・地質の関係

- 都市圏活断層図で推定活断層線が引かれた位置はおおむね山地・平野境界付近である。
- しかし、地表地震断層はそれより数10 m～数100 m平野側の扇状地の扇面や平野の上に出現した。
- 山麓では土石流による土砂の被覆や、縄文海進以降の海食による崖の後退によって、本来の断層位置よりも山側に「見かけ上」断層線が位置しているように見えることもある。



八代平野東縁における、令和8年熊本地震の地表地震断層と地形の
模式ブロックダイアグラム（発表者作成）

地元の男性「断層はもっと山の際を通っていると教わっていて、まさか自分の家の下に出てくるとは思わなかった。」

地形のみを基に推定された断層線は、必ずしも断層変位が出現するまさしくその位置に引かれているとは限らない。

まとめ

- 令和8年熊本地震の緊急調査を実施した.
- 現地では、日奈久断層の日奈久区間で約20 kmの区間で地表地震断層とみられる変状を確認できた. 2016年に活動した高野—白旗区間は、今回は誘発すべり（**triggered slip**）であった可能性がある.
- 八代平野の東縁を成す日奈久区間では、これまで山地—平野境界に推定されていた推定活断層線よりも、平野側に出現した. 本来の活断層線と違っていた原因は、土砂の被覆や崖の侵食・後退などの影響とみられる.
- 今後、地下構造や扇状地などの地形の形成過程も含めて、日奈久断層の活動履歴を明らかにする必要がある.

本研究の緊急調査においては、上廣災害対応基金を使用した。
記して感謝申し上げます。